



## 札幌の恐竜を さがせ!?



三重県鳥羽市から体長30mにもおよぶ巨大なカミナリ竜(ティタノサウルス類)の産出が報告されました。ところで、札幌から恐竜の化石が発見される可能性はあるのでしょうか？

恐竜が、地球上にはじめて登場したのは、今からおよそ2億3千万年前(二疊紀)のことです。もちろん、最初は二ワトリくらいの大きさで、実際に生きている姿を見て、恐竜と判断できる方は少ないと思います。ちょうどそのころ、地球上に最初の哺乳類も登場しています。恐竜と私たち人間を含む哺乳類は、地球の歴史の上では兄弟のような関係ともいえます。しかし、恐らくは肉食の恐竜たちの影におびえ、恐竜たちが寝静まった夜に昆虫などを食べていたのが私たちのご先祖のよう



恐竜は二疊紀からジュラ紀を経て、白亜紀

末に絶滅するまで、およそ1億6千万年以上も地球上の生物の主役を務めてきました。札幌から恐竜の化石が発見されるには二疊紀から白亜紀までに堆積した地層が札幌にあるかどうか第一の問題です。札幌には南区定山溪の薄別に白亜紀後期以前と考えられる地層が露出しています。したがって、札幌から恐竜の化石が発見される可能性がゼロとは言えません。次に、当時、恐竜が生息し、死後、化石として残りやすい環境にあったかどうか問題になります。白亜紀の札幌はそのほとんどの地域が陸の環境にありました。ですから、当時の札幌を恐竜たちが歩いた可能性は十分にありますが、その恐竜たちが海底や湖底に沈み、化石として残っているという可能性はきわめて低いのです。恐竜たちがかつての北海道を歩きまわり、同じ空気を吸っていたと想像することに夢を膨らませたほうがいいのかもかもしれません。

「ミュージック・レター」は、博物館(Museum)の語源であり喜びを意味する“muse”と通信を意味する“letter”から名づけた交流紙です。

特別寄稿

博物館探訪・スミソニアン①

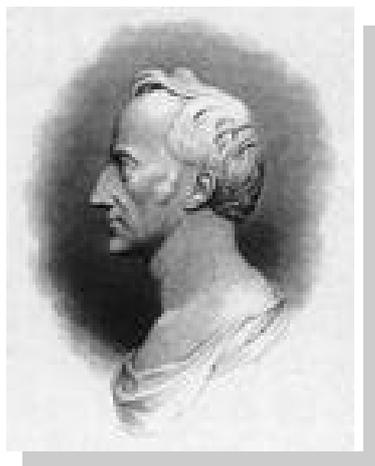
## 見知らぬ国へ全財産を寄贈した男

北川芳男（元北海道開拓記念館学芸部長・理学博士）

アメリカが世界に誇るスミソニアン協会は、現在、ワシントンD.C.を中心に、国内国外に26もの国立博物館・美術館および研究施設をもつ巨大な組織である。スミソニアン協会は、創立以来、今年で155年になるが、その歴史が示すあまり知られざる興味深い話をいくつか紹介しようと思う。

スミソニアン協会は、その名が示すように、英国人ジェームス・スミソン氏が莫大な遺産をアメリカ合衆国に寄付したことにはじまる。なぜ、英国人であるスミソンが、誕生間もないアメリカ合衆国に全財産を寄付したのか？その理由は彼の出生の秘密にあると言われている。

ジェームスの父ヒュー・スミソンは、富豪で高貴な家の娘エリザベス・パーシーと結婚し、公爵として英国貴族社会の名門に昇りつめた人物である。彼にはエリザベス・K・マーシーという愛人がおり、ジェームスは1765年に彼女との間にできた子であった。ジェームスは、マーシー家の後継ぎ、ジェームス・L・マーシーとして育てられた。ジェームスは、オックスフォード大学で化学・鉱物学を学び、1803年には彼の名前をもつスミソナイト（菱亜鉛鉱）の発見などの功績によって、ロンドン・ロイヤル協会の特別会員となった。一方、彼は1800年に母親の財産を相続し、1806年には、父の旧姓スミソンを受け継ぎ、



ジェームス・スミソン（1765～1829）

ジェームス・スミソンとなって父の財産をも相続した。こうして、彼は学問的な名声や巨大な富を手にしたにもかかわらず、愛人の子であるという理由だけで英国の貴族社会からは受け入れられなかった。こうした、貴族社会の仕打ちに対し、彼は深い恨みを持ちつづけており、復讐の意図があったかどうかはわからないが、1826年、一度も訪れたこともないアメリカ合衆国政府に彼の全財産を寄贈し、「スミソニアン協会の名のもとに、人類の知識の増進と普及のため」に役立ててもらおうと遺言状を作成し、それをおいのヘンリー・J・ハンガーフォードに託した。一生を独身で通したジェームスは、1829年、イタリア北部の街ジェノバで死去し、遺産の処置を託されたハンガーフォードも1835年にこの世を去ったが、遺産は遺言状どおりアメリカ合衆国政府へと寄贈されたのである。（つづく）

## 「札幌市博物館計画推進方針」とは

このたび本市の博物館整備の基本的な考え方や今後の博物館活動の指針を示した「札幌市博物館計画推進方針」を策定しました。そのあらましをご紹介します。

**Q** どんな博物館をめざしているのですか？

**A** 博物館の基本テーマは「北・その自然と人」です。札幌とその周辺地域（石狩低地帯）を対象エリアに、人と自然のより良い関係を考える自然系総合博物館をめざしています。

**Q** どんな活動をしていくのですか？

**A** さまざまな人や機関との連携・交流を図りながら市民参加の博物館活動を進めます。おおむね10年くらいを目安に、次の5つのキーワードにそって重点事業（5大プロジェクト）を実施していきます。

「サッポロを知る」

天然記念物である藻岩・円山原始林の植生調査と資料の収集を行います。

「サッポロを結ぶ」

身近な動植物の生息状況を調査する「自然モニター調査」を通じて、市民と市民、市民と博物館のネットワークをつくります。

「サッポロから広げる」

市民から寄贈された厚田産出の原始的なハクジラ化石について、ハクジラの系統解明のため、海外の研究機関と協力して研究を進めます。

「サッポロによせる」

豊平川を題材に、札幌の形成史や人々の暮らしとの関係などを多角的に探る「豊平川の総合研究」を進めます。

「サッポロを楽しむ」

子供向けコンテストなど、札幌を楽しみながら学ぶ「科学奨励制度」を創設します。

**Q** 博物館はいつできるのですか？

**A** まだその時期は明らかになっていません。当面は今年11月中旬にオープンする「博物館活動センター」(リンケージプラザ5、6階)を拠点にして、人、資料、情報などソフト面の蓄積・充実を図りながら、博物館の整備をめざしていきます。



この方針の本編をご希望の方は、係までご連絡ください。

人物伝

みなかた 南方 熊楠 (1867 - 1941)

粘菌や民俗の研究に力を注いだ世界的な博物学者・南方熊楠は、1867年（慶応3年）和歌山城下で金物商を営む商家に生まれました。幼い時から並外れた才能を発揮し、10歳頃から5年がかりでわが国最初の図解百科全書『和漢三才図絵』を筆写し、その後も貝原益軒の「大和本草」などの大書を異常ともいえる執念で写しとっています。

19歳で渡米後、さらにロンドンに渡り、1893年に大英博物館で東洋関係の資料を整理する仕事につきます。この間、博物館に通いつめ、おびただしい量の書籍を読破し、筆写し続けます。この時のノート52冊は『ロンドン抜書』として、熊楠の最も大事な財産となりました。彼には西欧文明に対するコンプレックスや不安を感じさせるところは見当たりません。むしろ意気軒昂として、しばしば『ネイチャー』を始め当地の雑誌に論文を寄稿した

り、学者たちと論争してへこませたりもしています。

1900年（明治33年）に帰国してからは、菌類、粘菌類の採集・調査に没頭します。南紀・熊野地方を修験者のごとく歩き回っては菌類を集め、人間離れた集中力で、数千点に及ぶ菌類図譜を残しています。1917年には自宅の柿の木から新種の粘菌を発見し、これは後に彼の名にちなみミナカテルラ=ロンフィラと命名されました。

また、時の明治政府が進めていた神社合祀によって、鎮守の森が破壊の危機にさらされていることに憤慨し、自然保護運動の原点ともいわれる反対運動に立ち上がります。

さらに1929年（昭和4年）には、昭和天皇を田辺湾神島（かしま）に迎え、長門艦上にて進講し粘菌標本110点を進献しました。この時献上した標本がキャラメル箱に入れられていて、天皇を驚かせたといわれます。粘菌というミクロの世界を観察する繊細な神経の持ち主である反面、豪放磊落な性格をうかがわせるエピソードです。（参考図書：「奇想天外の巨人」「新文芸読本」ほか）

札幌自然誌考⑦

札幌の植物



もうすぐ春、まもなく街中に色とりどりの花が咲き乱れる季節です。ところで、札幌には何種類の植物が自生しているかご存知でしょうか？ 1992年に原末次さんを中心とする研究グループが市内の植生を調査しました。それによると、札幌市内には1293種の植物が確認されました。それから十年近くが経過しています。その後、新たに帰化植物などが入り込んだ可能性はないのか？など、まだまだ未知の部分が多く残されています。さらに、原さんたちの調査では実物標本が残されませんでした。札幌市博物館計画では計画的に札幌市近郊に自生する植物をすべて標本として保管することをめざした調査を行っています。これまでにおよそ700種あまり、予想される総数の55%の標本が収集され、保管されています。

2001年主な博物館事業(予定)

- ・ 7月 夏休み体験学習「昆虫採集」定山溪
- ・ 8月 夏休み体験学習「化石採取」望来海岸
- ・ 9月 ロビー展「キノコのすみか」
- ・ 11月 博物館活動センターオープニング企画展
- ・ 12月 博物館フォーラム

編集後記

今年11月中旬に新しくオープンする「博物館活動センター」に、『My Museum』のコーナーをつくりたいと考えています。“自分の展示をつくりたい” “経験・知識を生かしたい” “こんな活動がしたい” アイデアだけでも結構、いっしょにお手伝いいただければなお結構！ 博物館大好き人間の心意気をぜひ係までお寄せください。（も）